

「使える英語」に近づけるための授業づくりの工夫

－ 英語を学び続けるきっかけづくり －

学習開発コース (11220912) 鳥海志帆

新高等学校学習指導要領では、外国語を通じて「コミュニケーション能力を養うこと」を目標として、「使える英語」の力をつけることが強く求められている。本研究では、授業展開、英語学習環境、学習者の意識や意欲と定着度の関連等を考慮し、英語を使うことを楽しみ、英語で発信でき、英語を通して視野を広げ、高校卒業後も、大学や社会で「生涯にわたって学び続ける自律した英語学習者」を育てるための授業のあり方について検討した。

[キーワード] 使える英語, ESL と EFL, 意識と意欲, 主体性, 自律的・継続的学習

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在及び研究の背景

近年「コミュニケーション能力」がかなり重視されている。英語教育においては「聞く・話す・読む・書く」の4技能を総合的かつ統合的にバランスよく育成し、生徒に「使える英語」の力をつけることが求められている。「使える英語」に近づけるためには当然のことながら、生徒が多くの英語に触れることが不可欠である。「話す」ためには十分に「聴く」必要があり、「書く」ためには十分に「読む」必要がある。新学習指導要領では生徒の発信力を高めることを目標にしている。英語を聴いたり読んだりして内容を理解し、それについて英語で話したり書いたりして伝えることができる生徒の育成が求められている。現状は「わかるけど使えない」生徒が多いと言われている。一般的に英語は大事であると捉えているが、その認識とは別に英語学習や英語使用に対する意欲は多様であり、日本人の英語力は低いと言われている。その原因の1つとして「文法・訳読」の授業形態が批判されてきた。授業は文法指導ではなく「コミュニケーション」をするべきだという指摘が多くなされてきた。しかし、文法もコミュニケーションもどちらも必要であると考え。外国語として英語(EFL)を学ぶ日本の環境は、第二言語として英語(ESL)を学ぶ環境とは異なる。そのため母語である日本語を身につけたようには英語が身につかないので、使うための規則である文法を理解する必要がある。日常の生活で英語が必然ではない日本では「これを覚えないと後で困る」という必要感はない。英語学習の意義を生徒に持たせること

が重要である。そのうえで文法は、理屈で理解させるのではなく、文やつながりの中で理解させることが大切である。その表現の使い方に気づき、理解し、使ってみることで身につく「活用できる文法」の習得が必要である。口頭でも書面でも形式的なフィードバックにとどまり、対人的なやりとり、つまり、「コミュニケーション」が不足していると考えられる。実際のコミュニケーションに役立つ文法を身につけるためには、大半が文法説明の授業ではなく、基礎基本的な表現を用いた言語活動が十分にある授業でなければならない。機械的な練習ではなく、実際の場面を想定した練習など意義のある言語活動を設定することで生徒に定着すると考える。佐伯(1992)は、外国語が自然に口から出てくるようになるまでにはかなりの反復練習が必要であり、習った文法を実際に会話で使ってみることが必要であると指摘している。英語を操るには日本語とは異なる文法の神経回路が必要で、その回路を作るには会話が最も有効であり、文法と会話は一緒に学ぶものだとしている。EFL学習環境の日本ではESLの指導法が必ずしも適用できるとは限らないが「使える英語」に近づけるためにその有効特性も考慮する。

また、大学受験対策が障害になって言語活動を行う時間が確保できないため、使える英語力がつかないという批判もされている。生徒の中にも英語はただの一教科と考えている者もいるが、英語を意志疎通の一手段だと考えれば、英語を学習し、使えるようになることで選択肢が増え、世界が広がる。受験も一つの利用方法であるが、それがすべてではない。金谷(2009)が指摘するように受験

対策で基礎基本を徹底することで「使える英語」の土台ができる。受験で通常問われるのは「聴く・読む・書く」であり「話す」に時間をかける余裕はないという意見もあるが、「話すための練習」が英語力を伸ばす基礎となると考える。

また、生徒の英語学習に対する意欲も重要である。英語の重要性を感じてはいるが、自分にはそれほど必要ではないと思っているために取り組みが不十分になると考えられる。佐伯(1992)によれば、学習することに興味を持つことが脳細胞の活動を高め、記憶が良くなるため、知的にも感情的にも外国語という異境を好む心が、外国語習得には最も必要であるとしている。興味を持たせるために、楽しいだけではない深い意味のある活動を取り入れ、達成感や成就感を感じさせることで生徒の学習に対する意欲が高まり、言語活動への取り組みが積極的になり、徐々に自信がつき、主体的に学習に取り組み、使える英語に近づくと考えられる。

(2) 研究の目的

- ①生徒が英語を理解し、使えるようになるために不足している要因を探る。
- ②学習意欲が高まり、「勉強しなければならない」よりも「勉強しよう」と主体的に学習する姿勢を育てるための授業展開を追究する。

(3) 研究の方法

- ①文献研究で、第二言語習得研究や様々な教授・指導法について検討し、実際に「使える英語」の力を身につけることを意識した効果的な教授・指導方法を探る。
- ②授業研究で、生徒に「使える英語」の力がつくために有効な英語表現活動とその実践、および授業展開のあり方について検討する。

2 先行研究の検討

(1) 外国語習得

斎藤(1996)は、学校のような人為的な言語環境で、特定の教材や教授法によって言語の使い方を身につけるのは言語学習(language learning)であり、それが output(speaking, writing)が正しいかどうかを monitor する役割を果たすと指摘している。そして、第二言語を習得する language acquisition を促進するために、comprehensible input(生徒にとって理解可能な教材)を多量に与えるべきであり、授業をできるだけ優しい英語で

行うことが前提であるとしている。過度の和訳を避けるだけでなく、structure や rule をあまり重視せずに、かたちから伝えられる message の内容を重視し、それが伝わることを優先している。

授業で教師が生徒に理解可能な英語を多用し、英語表現をインプットすることで授業内の簡単な英語でのやりとりが促進されると考える。さらに文法説明で思考を停止させずに生徒に思考させる授業の流れを意識し、英語での自己表現活動を多く取り入れることは有効である。

(2) コミュニケーション活動

静(2009)は一斉形態の授業をなるべく減らし、授業には全員が参加して(忙しくして)いるべきだと指摘し、生徒一人ひとりの発話量を増やし、かつ教師が確認する方法を提唱している。1時間の授業で生徒が触れる英語量を増やし、英語表現活動の時間を確保することが重要である。1授業時間内での課題設定を工夫、4つの領域の言語活動の統合を図ること、継続的な実践、基礎基本を土台にした応用への発展の重要性については様々な研究で指摘されている。これらに加え、英語でのTFやQ&Aは機械的にならないように追加の英語表現活動を設定するなどの工夫をすべきである。英語表現活動は、提示された例を真似ることから始めても、主体性を活かす課題の設定により、より自然なやりとりが可能になる力がついていくであろう。一方向ではなく、他者とのやりとりを意識させることで実際のコミュニケーションにつながると考える。

(3) 授業展開

生徒に身につけさせたい能力を明確にした、年間、学期、単元ごとの指導計画の作成の必要性が新学習指導要領に明記されている。これに加え、1授業時間という短期と入学から卒業までの3年間を見通した長期の目標と計画が必要であると考えられる。金谷(2008)によれば目標とニーズを整理することでミスマッチを避けなければならない。「どんな力をつけさせたいのか」「そのためにどうするのか」の長期的見通しを立てること、つまり、卒業時の到達点(何をできるようにしたいのか)と、入学時の現状(何ができて何ができないのか)を把握することが肝心だと指摘している。そのためには中学校の教科書と高校で使用予定の教科書の内容を把握する必要がある。各単元ではインプット→インテイク→アウトプットをきちんと関連さ

せて、アウトプット活動を見通したインプット活動を設定しなければならない。また、予習や復習のあり方も「日本語」ではなく「英語」を使わせる手立てが必要であるため、日本語訳や補助資料など配付プリントの内容も検討しなければならない。金谷(2009)は予習復習事項の検討や工夫、和訳配付など教科書の本文の扱い方次第で1時間内で生徒に与える英語量を増やし、言語活動の時間を確保したり、速読練習を行ったりすることも可能だと指摘している。

3 実践と結果

(1) 教職専門実習 I

山形県内 A 中学校 2 年生 1 クラスで、英語に対する意識を把握するためアンケート調査を行った。

表 1 アンケート項目とその回答例

Q1. あなたにとって英語とは？	
A. 好きな科目/得意な科目	
苦手科目	
将来 (国際社会で) 役に立つもの	
難しいけどわかると楽しいもの	
できるとかっこいいもの	
必要なもの/大切なもの	
視野を広げるもの	他
Q2. 英語を使ってやってみたいことは？	
A. 外国人と会話/電話	
海外旅行	
原作で本を読む/映画を英語で見る/洋楽を歌う	他
Q3. 英語の授業でしてみたいことは？	
A. 英語だけの授業	
外国人の先生だけの授業	他

授業では、新しい表現を導入する際に、可能な限り英語で理解できるように使用場面をイメージさせる例文の工夫や、表現練習方法の工夫を試みたが、生徒は日本語にして理解しているように感じた。ペアやグループでの会話練習では、理解の程度や取り組み方に差があり、やりとりが成立しなかったり、機械的な練習になったりしていた。

(2) 教職専門実習 II

山形県内 B 高校 1 年生 79 名を対象に英語に対する意識を把握するためアンケート調査を行った。

表 2 英語について (Yes の回答数)

好き	得意	大事	力をつけたい
35	17	73	72

表 3 大切だと思う 4 技能の序列

	聴く	話す	読む	書く
1	14	49	10	5
2	45	16	9	9
3	15	5	37	22
4	5	9	22	42

表 4 自分の英語力 (技能) の序列

	聴く	話す	読む	書く
1	16	0	40	23
2	25	8	25	21
3	25	22	10	22
4	13	49	4	13

表 5 つけたい英語力 (技能) の序列

	聴く	話す	読む	書く
1	8	51	4	16
2	35	14	13	17
3	23	6	31	19
4	13	8	31	27

表 6 授業における英語使用量について

英語使用量		生徒		
		増やしてほしい	ちょうどよい	減らしてほしい
教師	増やしてほしい	5	3	0
	ちょうどよい	12	56	3
	減らしてほしい	0	0	0

授業では、生徒が英語を使う場面を増やす目的で内容について英語で意見交換させようと試みた。「日本語なら言えるのに」というもどかしさを感じていた生徒がいた一方で、日本語でも自分の意見を伝えられない、伝えようとしない生徒もいた。テーマの難しさも一因であったかもしれない。恥ずかしいのか、自信がないのか、全体的に間違いを気にせずに「使おう」という姿勢はあまり感じられなかった。それとは対照的に山形県内 C 高校の生徒はカタカナ英語でも、間違っても積極的に楽しそうに歌ったり、発言したりしていた。

4 考察

A 中学校でのアンケート結果(表 1)から英語を実際に使いたいという意欲の高さが判明し、この意欲を活かした活動を仕組む必要性を感じた。また、授業実践から、全員を活動に参加させるためにペアやグループでの練習前の十分な全体練習や、意図的な組み合わせ、理解度の高い生徒が飽きないように発展課題を設定するなどの工夫が効果的であるとわかった。

B 高校ではアンケート調査(表 2, 表 6)により、英語の得意不得意に関わらず、生徒は英語使用にそれほど抵抗は感じていないとわかる。さらに、生徒は英語の重要性を感じており(表 2)、「話す」ために「聴く」ことが必要で、「聴く」ことができないならば「話す」ことができないという関連を意識しているようである(表 3, 表 4, 表 5)。この意識を活かし、授業で生徒に可能な限り聴かせ、そ

れをもとに英語を話す活動を設定する必要性を再確認した。生徒に、内容があり理解可能な英語を聴かせ、機械的ではない英語表現活動が有効である。授業実践では、日本語訳の配付により音読練習や英語でのTFなどに時間を割いたが、日本語を読んで考えている生徒がいることから、可能な限り英語を聴かせ、話させ、読ませ、書かせる手立てが必要である。また、C 高校生徒との姿勢の違いから、改めて生徒の意欲の重要性を実感した。

文献研究と専門実習からは、生徒の英語使用(聴く、話す、読む、書く)の機会を増やす工夫が大切であると考えられる。可能な限り日本語を介さずに、活動などを通して英語のまま理解することを促さなければならない。また、生徒の理解度に応じて、実際のコミュニケーションにつながる言語活動を効果的に設定し、導入から活動までの流れも重視する必要がある。さらに、段階的に英語表現活動の幅を広げ、要求度を高めることで、生徒の英語力向上を図らなければならないと考える。また、英語の授業は英語運用力をつけることが先決で、教科書内容の深い読みは不要であるという意見もあるが、自分の考えや意見を述べる力の育成を意図し、思考を深めるために必要な母語である日本語で意見交換することも有意義であり、徐々に英語での表現に移行することも可能だと考える。

どのような授業をしても、生徒自身に英語を使って身につける意志がなければ、「使える英語」には繋がらない。生徒の関心・意欲は外国語としての英語学習の重要な鍵である。生徒のやる気を起こすには教師がいかにやる気を起こすか次第だとも言われる。学校制度やカリキュラムに関わらず、授業をするのは教師である。教師が英語の意義を感じ、楽しみ、学び続ける姿勢を忘れないことが生徒の意識に効果的な影響を与えると考える。

5 到達点と課題

(1) 研究に関する達成度

研究を通して明らかになったこと

- ① 新しい表現方法が使えるようになるまでの流れの重要性
 - ・ 触れる→理解する→使ってみる→定着
 - ・ 効果的な言語活動＝具体的な文脈の想定、適切な使用場面と働きの選択、組み合わせ
- ② 外国語学習における動機や意欲の役割
 - ・ 英語学習の意義や必要感

しかし、これらに基づく授業展開を考え、実践するには至らなかった。

(2) 課題

① 個別確認と評価

- ・ 個々の生徒の英語の訂正改善方法
- ・ どの程度できれば可とするのかの基準

② 長短期的計画と目標設定

- ・ 「いつ、何を、どの程度」の明示

③ 言語活動とコミュニケーション

- ・ 4つの領域の言語活動の統合
- ・ 他者との関わりを通じた英語表現活動
- ・ コミュニケーション≠一方通行
＝「人と人とのやりとり」という意識

④ 生徒の英語に対する意識と学習意欲

- ・ 生徒の意欲を高める手立て
- ・ 英語学習の意義を感じ、「やらせられる」ではなく「主体的に」楽しんで取り組む姿勢の育成

⑤ 自律した学習者・継続的学習者の育成

- ・ 高校卒業後も英語を学び続けようと思わせるきっかけ作り
- ・ 自己目標設定・計画(方法手段)・自己評価ができる自律した学習者の育成

引用・参考文献

- 和泉伸一：『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』、大修館書店、2009
- ジャック・C・リチャーズ、シオドア・S・ロジャーズ：『世界の言語教授・指導法：アプローチ&メソッド』、東京書籍、2007
- 金谷憲：『英語教育熱—過熱心理を常識で覚ます—』、研究社、2008
- 金谷憲編：『教科書だけで大学入試は突破できる』、大修館書店、2009
- 佐伯智義：『科学的な外国語学習法—日本人のための最も効率のよい学び方—』、講談社、1992
- 斎藤英二：『英語授業レベルアップの基礎』、大修館書店、1996
- 白畑知彦編：『英語習得の「常識」「非常識」—第二言語習得研究からの検証—』、2004
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁：『第二言語習得研究—理論から研究法まで—』、研究社、2010
- 静哲人：『英語学習の心・技・体』、研究社、2009
- 高島英幸：『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』、2011